

ベトナム民族誌のマルチメディア的形態をさぐる： 大森康宏教授「新しい視覚情報開発のための民族誌 映画の分析と活用」プロジェクトに参加して

著者	未成 道男
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	35
ページ	31-35
発行年	2003-02-10
URL	http://doi.org/10.15021/00001971

ベトナム民族誌のマルチメディア的形態をさぐる

大森康宏教授「新しい視覚情報開発のための民族誌映画の
分析と活用」プロジェクトに参加して

末成 道男

東洋大学社会学部 教授

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1 はじめに | 先祭祀—潮曲の社会生活』制作の過程 |
| 2 制作の意図 | 5 制作の問題点 |
| 3 研究会 MO 版「ベトナムの婚礼」
制作の過程 | 6 どのように利用されどのような効果が
予想されるのか |
| 4 個人的習作 CD-ROM 版『ベトナムの祖 | |

1 はじめに

マルチメディア映像には全く無知であったのが、このプロジェクトに参加させていただいたお陰で、曲がりなりにも、CD-ROMの制作に取り組むこともできるようになり、共同製作の一環としての、CD-ROM「ベトナムの婚礼」のほか、ベトナムの民族誌『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』(末成 1998)の CD-ROM 版を出すことができた。といっても、実際の制作に当たっては、前者は中山氏が説明を画面下に入れる作業を、後者については、風響社の石井氏が CDBook 形式に仕上げていただいたので、以下の本論では、技術的には、映像の撮影、粗編集、トピック毎の映像選定、取り込み、デジタル変換、時間超過部分の切り捨て、シナリオの作成までの筆者が行った作業についての経過と問題点の指摘を行うこととした。

2 制作の意図

常々、フィールドワークの折り撮りためてきた手持ちのビデオ映像資料を、民族誌の一環として活用できないかと考えていた。これは同時に大学での人類学の講義の1つのメディアとしても役立つことができ、さらに現地還元の有力なメディアともなりうる。

1980年代半ばに8ミリフィルムを手がけ始めたが、機材の重さと1リールが3分程度では、単独調査の片手間という訳に行かず持て余していた。そのうちビデオカメラが手の届く価格になったので、研究室に入れていじっていたが、カメラだけでもゆ

うに2, 3kgはあったので、気軽に海外調査にもって行くことはしなかった。調査に携行するようになったのは、ビクターのVHSCが現れた1987年からであったと思う。それでも、2kg近くはあったが、中国広東省の梅県で、一世代前の重い機種を持っていた地元の人から羨ましがられた記憶がある。1991年東大に移ってからまもなく、撮影したテープが書棚を占領し始め危機感を抱いたのと、ソニーの編集用名機EVO9700の使い勝手にほれこみ、8ミリビデオに切り替えた。それ以降、調査には必ず持って行くことにしたので、これまで延べ約140時間位のテープが貯まっている。これらの一部は、フィールドから帰って講義に使うために、一度ダビングをして、一部は失敗部分を取り除き授業向きの1時間程度にまとめる粗編集を行い、タイトラーでタイトルをつけた。また、論文執筆に当たって、参考にするため取り出し写して見たものもあるが、それ以外は眠ったままになっていた。

ビデオ作品らしいものは、ただ1つ、東洋文化研究所の研究会報告で台湾民間信仰の功德儀礼についての発表に、1時間ほどにまとめテロップ説明を入れたものだけである。このテキスト部分は、後に紀要に執筆刊行されたが、ビデオ部分は未刊行である。

特に、1991年から初めて調査したベトナムは、フィールド自体の人類学的新鮮さに打たれたこと、ビデオ撮影に比重がかかったこと、フィルムやバッテリーなどの技術的改良の結果、スチールカメラ感覚で使えるようになったことなどの結果として、撮影量が飛躍的に増加した。また、ビデオモニターやカメラは地元でも普及し始めており、地元の要望に応える意味からも、撮影資料の公開は課題となっている。

3 研究会MO版「ベトナムの婚礼」制作の過程

研究会の課題として、上記のビデオフィルムの中から、婚礼を選んだが収録容量の制約から、その一事例の儀礼の一部に限定した。制作担当の中山氏と研究室で、フィルムを見ながら打ち合わせを行い、テキスト2種（文章と1行解説）と画像を渡し、制作をおまかせすることとなった。最初は、デジタル変換したものを渡す予定だったが、ハードの相性の問題から、アナログのビデオフィルムを渡すことになった。問題点としては、(1) 画像の色がかなりとんで、特に最初の画面は白黒のようになったこと、(2) 小生が多忙なため、制作過程での打ち合わせを省いたため、画面の進行に合わせたきめの細かい説明をつけられなかったこと(3) さらに欲をいえば、マルチメディアの実験として、それぞれの説明相互を有機的に関連づけるリンクを張るような工夫を行えなかったことである。

なお、この作品「ベトナムの婚礼」は、技術的には、画面の進行に合わせて解説をつけるという点で意味を持っている。また、その内容については、『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』のCD-ROMにある結婚式とは別の補完的事例として位置づ

けられるので、同書第7章II婚姻の項目（未成1998:376-400）の解説を参照されたい。

4 個人的習作 CD-ROM 版『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』制作の過程

上記研究会における「ベトナムの婚礼」の作成と並行して、定年退官前の出版として予定されていた『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』に CD-ROM を付けて刊行することが1996年末に本決まりになり、見積りの作成、業者の選定が行われたのは、1997年に入ってからであった。手間取ったのは、CD-ROM 出版という新しい形式が学内では前例が無いとして会計などの事務調整に時間がかかったことも原因の1つであった。その結果、退官を迎える年度末まで、1年と3ヶ月たらずという厳しいスケジュールとなった。入札に当たっては、大手業者も参加したが、その編集や開発費をふんだんに組んだ見積額は、用意していた予算を一桁上回るものであった。結局、規模は小さいが、既存のパソコンを主体にパーソナルな相談に応じてくれる風響社に決定した。研究室のマックのラムを増設し、ミロ・モーシオンなどのデジタル変換圧縮ソフトやPremierなどの画像編集ソフトを入れ、動画用にMOドライブを640KBに替え、実際の作業を開始したのは5月頃であり、粗編集、トピック毎の映像選定、取り込みは、夏休み明けにようやく一段落した。本来は、本書は、映像部分も本文と同等の比重を目指すものであるから、テキスト部分の草稿完成後、その編集と並行して行うことが望ましいが、期日が切迫しているのと、出版のためには、CD-ROM 部分を先に完成させないと目途が立たないということもあって、並行作業をしながらも、映像を優先せざるをえなかった。この際の編集作業で最大の問題は、予算の制約のため、全体でCD-ROM 1枚640MBという容量に抑えたため、映像の各カットを、辛うじて意味がわかるぎりぎりのところまで、極端に切り詰めざるをえなかった。これも、使用可能な容量が飛躍的に拡大すると予想される将来になればばかばかしい努力になるだろうが、現状では、やむを得なかった。

デジタル化に当たっては、幸い大きなトラブルは無かったが、オリジナルテープを受け付けず、予備のダビングテープでしのいだものも数本あった。原因をメーカーサイドに問い合わせる余裕も無かった。

同書では、映像だけでなく、テキスト部分とスキャナーで読み込んだ資料の画像、フィールドカードの一部をデータベースとして、盛り込み公開するなど新機軸を打ち出したが、オーディオ資料は機械がどういふわけか受け付けず、スチール写真と共に時間的余裕が無かったので諦めた。マルチメディアの眼目であるリンクは、石井氏の努力である程度実験的に張ることはできたが、最初に意図した本文テキストと一体化する試みは、テキスト部分執筆の完成が大幅に遅れ、また、CD-ROM の容量上の限界

もあり諦めざるをえなかった。

こうして切り刻んだクリップを組み合わせて編集したトピック毎のシークエンスを、編集後石井氏や学生に見て貰いそのコメントを得て手直しましたが、これも十分時間をかけることができず、せっかくデジタル画面での編集作業が、主に不自然な部分の除去修正に留まってしまった。

10月にムービーファイルに圧縮変換したMOを、石井氏に渡すと共に、ムービー用の解説を、マルチメディア構成用に、長短2種こしらえた。長めの解説を用意したのは、本文テキストとの直接のリンク付けを放棄した代案でもある。こうした、テキスト、映像、複写画像など各種素材を、石井氏にアドビ・アクトロバットで編集しPDF書類を作成、ブック形式にまとめ、ハイブリッド版に焼き付けるところまで仕上げていただいた。

5 制作の問題点

すでに述べたが、メディア容量の制約のため、映像を極端に短くせざるをえず、また、画面サイズもコンパクトサイズにせざるをえなかった。さらに、素材が、素人向けの最も簡単な機材によって調査の合間に撮影されたため、独立した映像としては見劣りがするものになった。これらの制約は、日進月歩の技術的な進歩により、早晚解決されることが予想され、短時日のうちに低技術水準の研究成果として取り残されるのは、新しい技術と結びついた研究の宿命であろう。

より本質的な問題としては、マルチメディアとしての試みが、初歩的な段階に留まり本格的な実験ができなかったことが挙げられる。これは、テキストの完成を待たずに、映像を完成させなければならないという時間的制約が直接の理由であるが、海外の先行研究などのフォローが不十分であったことが大きい。また、同様な理由でマルチリンガル構成にできなかったが、現地との対話をはかる意味でも今後試みたい方向である。

6 どのように利用されどのような効果が予想されるのか

本論でいうマルチメディア民族誌は、まず第一に、テキストと映像を組み合わせた民族誌として、従来の民族誌の性格を大きく変えるものと位置づけられる。有機的な結合をはかるためには、現地調査の時点から、マルチメディアに向けた構想を描いてすすめる必要がある。また、積極的な読者を獲得するためにも、映像を含む作品に的確なコメントを行える書評サークルの形成が望ましい。

さらには、近未来的には、インターネット形式による出版メディアの普及といった

形で、現在の学術書出版の隘路を克服し、新たな地平を切り開く可能性をもっている。

第二に、教材としてこれまでのテキストのみの民族誌、あるいは映像のみの民族誌フィルムに対して、読者の能動的利用を可能にする点が、注目される。今回、出版後、民族誌の授業（200名余り）で放映解説を試みたが、定価は学生の購入しうる範囲を大幅に超え、図書館に備え付けうる部数は受講者に比しごく僅かなので、課題として出さなかったためもあって、手応えのある反応はえられなかった。将来、有機的な利用方法が充実した段階で、PC教室を利用したカリキュラムによる授業を組むことは可能であろう。

このような現状を越えて、近未来的状況を想像してみると、現在は教材を前に戸惑いがちの学生も、ファミコン世代としてきたえられたハンドリングを活躍させるような形でインタラクティブなテクニックの導入が行われれば、単に教材の提示を受け身に見ることからは想像がつかないような理解内容の多角化が予想され、多面的な評価システムの構築、学生参加による創造といった点での進展が予想される。

第三に、現地還元の1つとして、かなり有効なメディアとなりうる点も注目されて良い。刊行された民族誌による現地還元はテキストレベルでは、仮に言語の問題が解決されても、アカデミックなスタイルと内容により限界がある。しかしマルチメディア形式の民族誌は、映像を有機的に組み合わせることにより、調査の意味を身近に感得でき、また、現地の人々自身の能動的な参与の可能性を持っている。今回の作品は、小学校などにある現地のパソコンでうまく動作したかどうか確認していないが、ベトナムでさえ、コンピューターがむらに入るのはそう遠い先のことではない。したがって、現地還元のメディアとしての役割を果たす可能性をもっているのである。

こうした個別的な現地還元と並行して、近未来的には、研究成果をストックし求めに応じて自由に発信しうるようなデジタルアーカイブの構築が、共同利用研究所などしかるべき機関などにおいて行われ、現地からも直接アクセスできるようになれば、単なる還元から相互的な関係に転化しうるであろう。

文 献

末成道男

1998 『ベトナムの祖先祭祀—潮曲の社会生活』東京：風響社。

